

渡辺克己著



第十九章・東新町かいわい



奥付け／デジタルブックについて

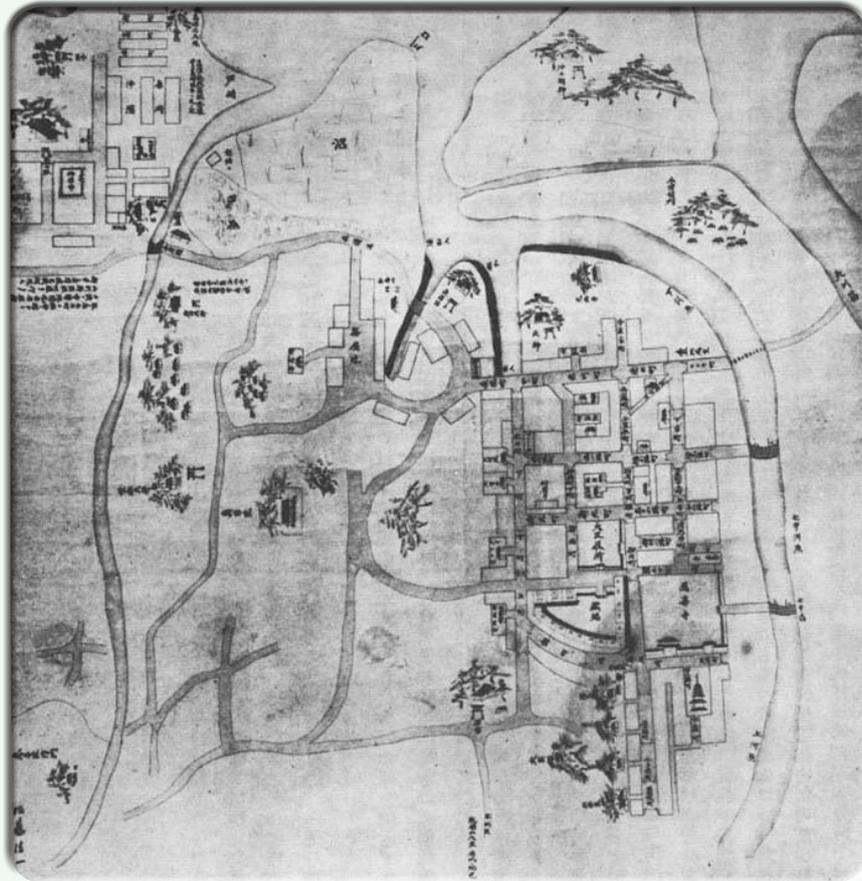
- ・ デウス堂の回想
- ・ 忘れられた神さま
- ・ 万寿寺興亡史
- ・ 紫山老師の孤児院
- ・ 渡し船と焼きモチ屋
- ・ 坊ヶ小路の首切り
- ・ 街道筋の農家町

【写真】大友時代の古地図（模写）

第十九章 ● 東新町かいわい

発刊に当たって

▽この電子ブック「大分今昔」は昭和 37（1962）年 11 月から翌 38（1963）年 12 月末まで、1 年 2 カ月にわたり大分合同新聞に 295 回連載され、連載から 20 年後の昭和 58（1983）年大分合同新聞文化センターで書籍として出版されたものを、電子ブックとして再編集したものです。したがって、文中の「現在」とか「いま」というのは昭和 37、8（1962～63）年当時のことです。▽使われている町名も、その後、街区制の変更によって連載当時とは変わっており、その場所を知る手がかりになる建物も、いまでは移転したり、なくなったりしているものがあります。このため、おもなものは各章の終わりに「注」として、昭和 58（1983）年現在の町名、場所を説明し、わかりやすくしています。



大友時代の古地図（模写）。東新町、元町一帯が当時の中心市街地だった

街道筋の農家町

元町回りの国道十号線が東新町の狭い通りにつながって
 たら、東新町は往来する各種の車にもみくちやにされている感じ
 だ。それにしてもこの町、いつまでも場末の町的ふんいきから
 抜け出せない。「通り抜ける町」の宿命とでもいうものか。

もともと東新町は戸次街道の街道筋だった。上野の峠を越え
 てきた人たちは、東新町から塩九升に入り、塩九升口のご門を
 抜けて米屋町にさしかかって、ようやく府内にはいったという
 あんど感にひたる。

だから東新町は、あきないの町ではなりたたない町だった。
 街道筋に面してワラぶきの農家が並び、こえたごが軒にぶらさ
 がっているといったぐあいだ。



昔の酒造りの家（挿絵：田中 昇）

しかし、まったく商人がいなかったわけではない。万寿寺入
 り口からすこし北によっ
 たところに、現在も灰色
 の壁の大きな昔風の家が
 ある。明治初年までは「老
 松」という酒を造ってい
 た秦野屋という大きな造
 り酒屋であった。このあ
 とを岩田屋が継いで酒屋
 をしていたが、大正の初
 めごろまでは町内の人は
 「秦野屋に酒買いに…」

と昔の屋号のまま呼んでいたそう。いまは古びた家の形だけが昔のおもかげをとどめ、岩田屋は家の一部に縮小して酒の小売りをしている。

岩田屋の筋向かいに、明治年代に津留から出てきた河野富太郎さんがしょうゆ醸造をしていた。このあとを現在の伊東丸い醤油の先代伊東勇平さんが昭和十年に竹中から出てきて引き継いだのだった。大智寺入り口から少し南に行つたところに西甚平さんが西甚種物屋を明治年代に始めた。大分町では、種物屋の草分けだったという。

大智寺門前に明治から大正にかけて貝原重就さんの仏具屋があった。この店も古いのれんで、大分町の神社のミコシなども頼まれて作っていた。

現在の平山精米所のところに、豊岡（日出町）から進出してきた村瀬竹五郎さんが絹糸の製糸工場を建てたのは大正年代のことだった。この工場は間もなく外堀の現在の杉野百貨店のあたりに移りそのあとを平山始さんが精米所にしたのだった。

そのほか、明治大正代には小野寿一さんの「奴もち」屋、吉富虎次郎さんの乾物屋、甲斐仙太郎さんの金グツ屋などが、農家の間に点在していた。

昭和初年に、中島循環道路が塩九升、東新町の東側裏の畑の中に延長される計画がたてられた。これはさらに顕徳寺町から大分駅前に出る、市周辺をめぐる大循環道路構想で、これを電車が走るようになるというので、このかわいは活気づいたことがあったが、実現しなかった。もし実現していれば、現在とはまったく違った繁華街が生まれていたかもしれない。

坊ヶ小路の首切り

家並みは東新町の街道筋だけ。西の方は畑続きの向こうに大分高等小学校（現金池小）、その向こうはるかに大分停車場が見通せる田園地帯。東の方は万寿寺の広大な寺域と来迎寺があるほか、大分川にそって杉の林がこんもりと茂っているのが見えた。この荒涼とした地帯が坊ヶ小路。顕徳寺町は大智寺の向こうに広い実習耕作地を持った大分県立農事講習所があるほか上野まで家は一軒もなかった。これが明治から大正にかけての東新町かいわいの姿だった。

農事講習所ができたのは明治四十一年。たくさん講習生のために、付近の民家を間借りして、所外寄宿舎にし、一、三人ずつ分宿していた。この農事講習所に原蚕種製造所を併設していたが、大正四年に坊ヶ小路に新築分離した。農事講習所が、農事試験場となって南大分に移ったのは大正十三年。原蚕種製造所はずっとおくれて、昭和十五年に南大分に移って蚕業試験場となった。そのあとは繭検定所となって現在もある。

坊ヶ小路の川原は、藩政時代には罪人の首切り場に使われたものらしい。「あの家は首切り役人の子孫だ」と、このかいわいの人にいわれていた一家が大正ごろまであったそうだ。

文化九年（一八一二年）に奥郷（庄内町一帯）の農民が、庄屋の私利私欲に苦しめられ、あるいは年貢の重いことなどを申し立てて、いっき（一揆）を起こしたことがある。

これは文化八年に岡領内で起こった騒動がきっかけとなって豊後の各藩内に波及したもので府内領では奥郷だけが騒いだ。

たいして大きなものではなかったが府内藩は大いにろうばいして、申し立ての儀はせんぎをするからと静まらしておいて、首謀者五人を捕え、そのかしらと目された野畑村の律右衛門を坊ヶ小路で処刑したとある。

当時のことを記した脇蘭室の「党民流説」によると、律右衛門は、仕置き場にすわり、役人に頼んで筆と紙をもらって辞世の歌三首を書きしるした。

かみだてるしにもくもりのはれやらで

おぼつかなくも長の旅立

ふみ月のすえの六日にとらはれて

ここにさはるうさ雲もなし

此世こそ千々にさまよふ人ごころ

弥陀の御国に迷ふ道なし

書き終わると、たばこを二、三ぷく、ゆつくりのんで「さあ、切られましょう」と首をさしだした。ときに文化九年七月二十六日。このときの農民いっきは、べつだん乱暴らしいこともなかったのだから、いわば他領のいっきに便乗した陳情団のようなものだ。その指導者を処刑するとはひどい。それにしても律右衛門という人は農民魂をみせた見上げた最後だった。

渡し船と焼きモチ屋

滝尾橋ができたのは大正年代で、それまでは、いまの橋の位置より少し上手を、渡し船が往来していた。これを坊ヶ小路の渡しといった。

もう一つ上の広瀬橋は、戸次街道の主要交通路に当たるので、明治末には橋がかかったが、それまではやはり渡し船で、これは古国府の渡しと呼んでいた。明治年代へんくつおやじの船頭がいて、気に食わないと船をなかなか出さなかったそうだ。

この渡し船は藩政時代、藩がめんどうをみてやったようで、渡し守が船を新造するさいは、藩に願い出て資金を拝借し、十年賦ぐらいで返済している。坊ヶ小路の渡しには、やはり藩から金を借りて板橋を設けたこともあった。しかし洪水ですぐ流され、かけ替えたならまた流されるという、いちぢごつこの末やはり船がいいという結果になったようだ。

府内藩の記録によると、正徳元年（一七一一年）に、坊ヶ小路の渡し守一同から、こんな願書が出ている。「坊ヶ小路の橋は、近年川筋が悪いため再三流されており、先月（七月）二十二日の洪水に、またまた橋板が流れました。往来がしげく、渡し船は混雑し人も馬も往来が遅れて困っております。お慈悲をもつて架橋の費用銀三百目お貸しくだされたく…」

現代文に直してこの程度だ。原文はもつと恐れながらの平身低頭ぶりである。領民の交通の便をはかるのは為政者の当然の仕事だ。それを「お慈悲をもつて…」領民に金を貸してやって、その方たちがやれというわけだ。もつとも当世だってお役人の頭の中に「お慈悲」的やり方がないとはいいきれない。

藩から借りた金は渡し賃を徴収して返済した。明治になっても一銭の渡し賃をとっていた。当時は川も深かったとみえ、大きな帆掛け船がときおり川を上下していた。明治の末ごろも坊ヶ小路の杉林の間から、白帆がちらちら見えかくれするのが東

新町の家の中からのぞまれた。

「おや、きょうも帆掛け船が上がってきたよ」

こどもたちは縁に立ってそれを見送った。東新町平山精米所の老夫人の思い出話である。

この坊ヶ小路の杉林のはずれに焼きモチ屋があった。おやじさんは岡崎秀助さん、おかみさんはナオさん。人のいい夫婦だった。米の粉をねって黒砂糖入りのこつてり甘いアンコを包んで、平ぺったくして鉄板の上で焼いた。そのにおいが川ぶちまで流れてきた。あの焼きモチ、四枚で一銭だった。別に一くし五厘のアンコロモチも置いていた。

川の向こう、滝尾、牧、桃園方面から大分中学に通学する悪童連にとつて、焼きモチ屋は絶好のたまり場だった。「おばさん頼むよ」と、下校の途中クツやゲートル、カバンまで預けて、どこかに出かける相談ができあがる。クツとゲートルはいつも十人分ぐらい預けてあった。家からはゲタバきで、ガラリガラリとのしてきて、ここではき替えて登校する順序だ。

秀助さん夫婦はこの悪童連のめんどうをよくみてくれた。滝尾橋ができたのは大正になってから。その後も焼きモチは続いていたが、杉林が切られるに従って、いつの間にか店をたたんでしまった。

紫山老師の孤児院

養護施設わかば園の歴史は古い。大分県における社会事業施設の草分けだろう。

明治三十七年に、万寿寺の柴山老師が「大分育児院」の名で春日浦の蓬萊に創立したのが始まりだった。資金があつてはじめたのではないから、あのあたりにあつた庵寺のあき家でも借りて孤児を収容したのにちがいない。

その翌年、荷揚町の古い民家を借りて引き越している。場所がはつきりわからないが、いまの水産会館のあたりではなかるうかという。東新町の現在地に移つたのは明治四十一年。日名子弥平さんという人の所有だつた草ぶき一むね、納屋一むねを三十二円五十銭で買って引越したという。

日露戦争のまっ最中に、東北地方は大凶作に見舞われた。国の存亡をかけた大戦争に手いっぱい政府は、そんなことにかまっていられない。餓死者が続出し、孤児がさまよつた。戦争がすんだ翌年（三十九年）それらの孤児を全国の社会事業家が引き取つたらしい。紫山老師も東京築地の本願寺まで出かけて行つて二十四人の孤児を連れて帰つた。当時の記録に東北の孤児を加えて収容児六十七人とある。

これだけのこどもを一仏教家が慈善家の喜捨だけで養育するのはなみたいていのことではない。

大分育児院内で洗ひ粉を製造し、あるいは水白粉や香水を仕入れて孤児たちに売り歩かせた。また孤児たちが楽隊を組織して雇われていたり、当時としては珍しかった幻灯を持つて佐伯方面まで出かけて行つて募金をしたりしている。

篤志家の応援も積極的だった。織部医院の院長織部寛一郎さんや、野崎医院の野崎浩さんなどは、その篤志家の中心となつて活躍している。

孤児のへやをみるとノミ、シラミの巢で、その非衛生は目をおおわしめるものがあつた。こんなことではいけないと、篤志家の間に育児院新築の話が持ち上がり、寄付帳を県下に回して募金をし、あるいは山田耕筈を招いて県下各地で音楽会を催し、その収益を建設資金に当てたりした。この音楽会開催に手弁当で駆け回って世話をしたのは米屋町の日本画家秦米陽さんと、そのむすこの知行さんだった。

こうして、舎屋も一応見られるものとなり大分育児院の基礎も固まっていたのだった。

大分町の婦人会もずいぶん世話をしたらしい。東新町に育児院が移るとき病舎一むねを婦人会の寄贈で建てている。育児院後援者の記録の中に高村千代子、岩田英子、長野チサ子、溝口マツ、佐藤サイなどの名が出てくる。この人たちが婦人会の中心になって育児院のために努めたのではなからうか。

大分育児院翼賛員という後援グループもあり、多くの寄付金を積んでいる。森島滝槌、河野卓治、後藤喜太郎、安藤茂九郎、後藤嘉一郎、岩田伝次郎、白井吉太郎、福崎清八、佐藤宇三郎などの名がちらねてある。紫山老師は、大分育児院運営には心を傾けたようだ。絶対に怒った顔をしたことのない老師が京町の播磨屋に寄付依頼に行ったとき激怒して出てきた。

「老師の怒った顔は先にもあとにもあのとみに見ただけだった」と側近の人がいつも語っていたそうである。よほど老師の事業にたいして傷つけることをいわれたのだろう。

昭和になって大節老師が保育園「東光若葉園」を併設した。戦後市営に移されたとき、この名を施設名にとったのである。

万寿寺興亡史

蔭山万寿寺が現在地に再建されたのは江戸時代の初期だが、波乱に富んだ歴史は元町における旧万寿寺の方にある。歴史家の興味もこの方に集中している。

その創建については、百合若大臣伝説の中に模糊として消えていて、尋ねるすべもない。現在帆秋精神病院の病舎の真裏に方数メートルの、コンクリートブロックで囲んだ土壇があり、その上に宝永三年（一七〇六年）に旧万寿寺境内の輪蔵跡を記念して建てたものといわれる一石一字塔が、横倒しになったまま置いてある。この小さな土壇は、いまも万寿寺の所有地になっているようで、帆秋病院の病舎建築には大いにじやまになっているようすだ。しかしこれが旧万寿寺の位置を示す重要な目じるしであり、寺も郷土史家も、これは守り通すに違いない。

この輪蔵跡付近を中心に広大な寺域を持った万寿寺の歴史がくりひろげられた。近年、付近の畑から古瓦の破片が採集されたそうで、それから推定して藤原時代、あるいはそれ以前からここに寺院が存在していたことは確実だといわれる。国府時代豪族にささえられてこの地方の文化の一翼をなっていたのだ。

大友時代には、大友氏の保護のもとに最も栄え、臨済宗の日本山につぐ十刹（さつ）の一つにかぞえられ、僧房十余区、寺地方八町、数百人の僧がいたと伝えられている。この大寺院が、大友宗麟のとき焼き払われた。宗麟の近習工藤帯刀というさむらいが、宗麟の怒りにふれて万寿寺に逃げこんだ。田原紹忍が宗麟の命を受けて寺に踏みこみ、工藤を捕えようとしたと

ころ、僧衆が抵抗したために火を付けて焼き払ったのである。宗麟がキリシタンの布教を許し、仏教にたいして政策的に圧迫を加えていた時代だ。田原紹忍は僧衆の抵抗をいい機会に、火を放って万寿寺の壊滅をはかったのだろう。

こうして再建されないまま府内藩の治世となり、もと寺僧だった玉英という人が府内城主竹中重隆の許可をえて東新町の現在地に草庵をいとなみ万寿寺と号した。しかし後援者もなく失望した玉英が草庵を捨て去ろうとしたとき、大分郡光吉村（現在大分市東植田）からでし入りしていた丹山という十七歳の少年僧が玉英を助けて万寿寺再興をはかることとなる。丹山のめざましい活躍で、竹中重興の助力をえていくつかの堂宇を建設したのが寛永八年（一六三一年）。ここに現在の万寿寺の基礎が固まった。丹山は万寿寺中興の開祖とおがれている。

以上が豊後の興亡の歴史とともに歩んできた万寿寺の略史だが、私たちにとって忘れられない人は紫山老師である。明治、大正、昭和の長い間、市民の中にとけこんで、市民の精神生活にいまもなつかしい影を宿している紫山老師。満百歳で昭和三十四年に静岡県方広寺で入寂した。同寺ではいま老師の事績を一冊の本にすべく編集しているそうである。

忘れられた神さま

大友時代の府内を描いた古地図をみると、大智寺（東新町）と稲荷社（坊ヶ小路）は現在の位置を動いていない。移動の激しい町の中にあって連綿として同じ位置に続いている社寺は珍

しい。郷土史家は東新町から元町にかけて繁栄した旧府内の市街の形態を現在の町の中からさぐり出す手がかりとして、大智寺と稲荷社を非常に重要なものとしている。

大智寺にお参りして、本堂を右に回って見たら、裏手のところに、高さ二メートルばかりの石造の社殿風のものがあった。なにかいわれのありそうなもので中をのぞいてみたら、木彫彩色の古びた神体が安置されてある。

ちょうど雨の降る日で、コケのしみついた石屋根に雨滴がはねかえって、中のご神体もしっとりとして湿りを帯びているもようだ。このままにしておく、やがて色ははげ落ち、木質はくさって、ぼろぼろとくずれるだろう。

文献を調べてみたら、吉弘天神という、いわくのあるものだった。

吉弘一頓（あるいは一曇）という人が、大友親世（あるいは氏継）に仕えていたが、心のよこしまな臣のために、あらぬことを告げ口されて親世に殺害された。すると一頓の死霊が親世とその一族を苦しめたので、親世は大いに悔い、大智寺境内に神殿を建ててまつた。いらい一頓の恨みも消えて府内の鎮守となり、人々は吉弘天神としてあがめた。というのだ。

明治になって神仏こんこう禁止のため、社殿をこわして神体だけを本堂内にかくしておいた。後に笠和町の笠和天神が新たに社殿を建立することになったので、笠和天神がそれまで使っていた石造の社殿を大智寺が買いとって、寺の裏側に運び、この中に神体をおさめた。これが現在のものである。

笠和天神は現在なくなってしまうが、その古い社殿は、吉

弘天神のものとなって現在まで残っているわけだ。石造であったおかげだ。それにしても寺の裏側で忘れさられている吉弘天神は、美術的に価値のないご神体かどうか知らないが、あのまま朽ち果てさせるのは気の毒だ。

坊ヶ小路のお稲荷さまには昔、耳ふさぎ祭りという行事が行なわれていた。厄ばらいのような行事だ。いまはそんなことをする者はいないが、明治、大正ごろまでは、同年の者が死ぬとモチをつけて、これを耳に当てそのモチを遠方のヤブなどに捨てる習俗が市内にあった。民俗学でいう同齡感覚で、ひとり死ぬと、同齡者も誘われるという恐れから、耳にふたをして、同齡者の死を聞かないことにするわけだ。これを「耳ふたぎモチ」といった。お稲荷さまの耳ふさぎ祭りは、これを集約したようなものだったのだろう。いまはそんな行事は忘れられ、商業神として大いに繁盛している。

デウス堂の回想

頭徳寺町の小野建アパート北側の道路わきに「デウス堂跡」の大きな標識が倒れそうな姿勢で立っている。

キリシタン文化が、大友宗麟の治下にけんらんと咲き誇った府内の往時を再現したいと、戦後上田市長がこれに情熱を傾けたことは、いまは市民の記憶から遠ざかりつつある。この「デウス堂跡」の標識も、戦後いち早く郷土史家からその位置の意見をきいて上田市長が建てたもので、豊後キリシタンの史跡をあらわす唯一のものだ。最初はたしか東新町の本通りを、まっ

すぐに上野に行く途中の、踏み切り少し手前に建ててあったように思うのだが、いろいろと調査の末、現位置付近が、たしかにそれと決定したものでらう。

キリシタン文化遺跡顕彰の夢は消え、デウス堂跡の標識が倒れかかっている、いまから四百年の昔この地に全国にさきかけて、しかもどこよりも最も盛大に海外の文化が移入され、われわれの先祖がそれをおう歌した事実、大分市の歴史のうえに輝いている。

府内にキリシタン宗(キリスト教の中のローマ旧教)が伝わったのは天文二十年(一五五一年)に、耶蘇教の宣教師フランシスコ・ザビエルが府内を訪ずれ、大友宗麟に会ってからだ。これは歴史にあきらかだから、いまさら書くこともあるまい。

府内に教会を建てたのは、ザビエルとともに東洋の伝道に従事していたバルテザル・ガゴで、ザビエルの府内訪問から二年後に日本人信徒らの奉仕をえて新築した。この府内教会(「デウス堂」)を足場としてキリシタン宗が非常な勢いで浸透していったのである。

豊後キリシタンが府内に設けた最初の施設は府内教会に隣接して建てた育児院だった。当時、貧しい人たちは赤ん坊が生まれるとすぐに消してしまう「間引」というのが行なわれていた。ポルトガルの商人兼医師アルメイダはこれに心を動かされ、耶蘇会の日本における最初の文化的社会的施設として設立させたもので「幼児を殺さず育児院に連れくること」と宗麟に布告を出してもらっている。この育児院は、のちに府内病院に拡張して外科、内科などの病院を運営している。

教育では、入信したキリシタンにキリスト教理を教えるほか、地球儀図、数学器、楽器、時計などを用いて新しい世界観と知識を教えた「教理学校」。キリシタンのこどもに宗教をはじめ、日本文字やラテン文学の読み書き、算術、唱歌、作法を教えた「初等学校」。そして伝道士養成を目的とする「コレジヨ」。このような施設が顕徳寺町一帯に設けられ、日本人信徒の聖歌隊の合唱が清らかに流れていたのだ。顕徳寺町は、教会を寺院ふうに「天徳寺」と日本呼びしていたのが後世に転化して町名となったものといわれている。

天正十四年（一五八六年）島津軍の府内来襲で、これらの施設はことごとく焼きはらわれ、つづいて藩政時代のキリシタン弾圧の長い受難期が襲い、キリシタン遺物は地上から全く消えてしまったのである。

「デウス堂跡」の標識のそばにたたずんでも往時を語るものは何もない。しかし四百年の昔、この同じ土を踏んで新しい世界観に心をときめかした日本人キリシタンが、デウス堂の鐘に耳をすまし、けいけんな合掌をする姿がふと、そのあたりにあるような、白昼夢に襲われるのだった。



オオイタデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公

開します。そして、読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたく願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「大分今昔」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！

デジタルブック版「大分今昔」 第十九章 ●東新町かいわい

2007年12月21日初版発行

筆者 渡辺 克己

挿絵 田中 昇（着色：佐藤 克治）

編集 大分合同新聞社

制作 川村正敏／別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部

発行 NAN-NAN 事務局

〒870-8605 大分市府内町3-9-15 大分合同新聞社 総合企画部内

© 大分合同新聞社

著者略歴◇渡辺克己

大分県大分市佐賀関町木佐上出身。大正二年生まれ。朝鮮京城で新聞記者。終戦で引き揚げ、大分合同新聞記者。こども新聞、学芸部等の部長を経て調査部長を最後に昭和四十三年定年退職。昭和二十七年から同四十二年まで大分市教育委員、昭和四十三年から同四十八年まで民生児童委員。
郷土史を研究し「大分今昔」「豊後のまがい物散歩」「国東古寺巡礼」「忠直卿狂乱始末」「真説・山弥長者」「豊後の武将と合戦」「ふるさとの野の仏たち」等の著書。